人口減少が続く中山間地の移住者増加策の検討

～ 生活ガイドブック作成および復興支援活動を通して ～

常葉大学 経営学部 経営学科
教　　員：　准教授 山田 雅敏，　助教 酒井 春花
参加学生：　小野 真吾、佐野 功汰、西貝 瑞稀，佐野 由奈，加藤 遥

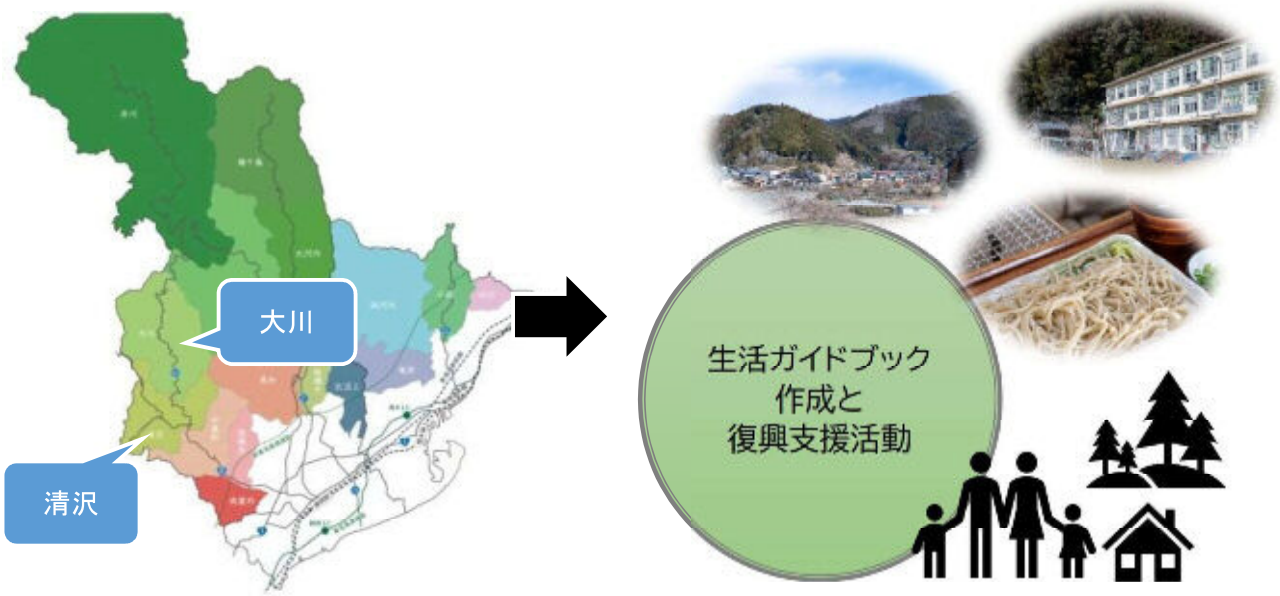
1. 要約

本研究では，人口減少が続く静岡市葵区オクシズへの移住者を増加させるための方略として，「暮らしの充実」に焦点を当て，大川地区の移住者向けの生活ガイドブックを作成した．具体的な方法として，地域住民へのアンケート調査により情報を収集，さらには大川地区の現地調査を実施し，掲載内容を検討した．今後の予定として，制作した生活ガイドブックは，関連施設や各移住支援センターでの配布を予定している．以上の試みにり，移住者にオクシズでの暮らしを県内外に周知できることが見込まれる．

2. 研究の目的

静岡市では人口ビジョンの総合戦略を掲げ人口減少対策を推進した結果，減少速度の緩和が認められるなど，対策の効果が認められた．しかしながら，旧安倍６村をみると過去8年間で人口の約25%が失われている状況にあるなど著しい人口減少が大きな社会問題となっている．これまでの取り組みの成果により，人口減少が緩和されている一方で，より積極的に課題解決に取り組むことが求められている．

そこで本研究は，①暮らしの充実を目的に大川地区に焦点を当て，同地区の調査により生活ガイドブックを作成すること，②台風15号の復興支援活動（大川・清沢），の2つを主たる目的とした．意義として，葵区Move To Okushizuの戦略の「住んでもらう（移住人口増加）」と「住み続けてもらう（定住人口増加）」の向上が期待される．



【左画像の出典元】静岡市公式ホームページ：中山間地域「オクシズ」の活性化
https://www.city.shizuoka.lg.jp/112_000065.html（閲覧日：2023年2月3日UTC）

2　研究の内容

2.1　実施内容

8月15日	キックオフミーティング（場所：葵区役所）
8月～9月中旬	学生による打ち合わせ，アンケート項目の立案・作成
10月10日	現地調査（大川そばの花見まつりに参加）
10月23日	現地調査（大川・清沢）
11月5日	本学学園祭で台風15号復興支援を目的とした清沢の特産品を販売
11月6日	現地調査（清沢秋まつりに参加）
11月15日	常葉大学生による被災地支援活動の報告（場所：静岡庁舎新館）
11月27日	現地調査（大川の収穫祭に参加）
12月23日	大川・清沢の自治会長および移住促進担当者へのインタビュー調査
1月上旬～下旬	大川地区を対象にアンケート調査の実施
1月25日	大川地区の撮影，大川歴史資料館を見学
1月28日	大川・七草祭りの見学
2月5日	清沢祭りの見学
2月26日	静岡オクシズ卓球フェスin藁科
2月上旬～3月下旬	アンケート調査の取りまとめ，生活ガイドブックの完成（予定）

※ 9月23日～9月24日：　台風15号によるオクシズ地域への被害が発生

※ 7月下旬～8月中旬，および12月に新型コロナウイルスの新規感染者数が急増

8月：キックオフミーティング

9月：学生の打ち合わせ（常葉大学）

10月：大川そばの花見まつり

10月：学生による現地調査

11月：学園祭にて清沢の特産品販売

12月：地元住民へのインタビュー

1月：大川歴史資料館での情報収集

1月：大川の七草祭り

2月：静岡オクシズ卓球フェスin藁科

2.2　ミーティングおよび情報共有の方法

基本的に，常葉大学内の研究室でミーティングを実施し，生活ガイドブックについて検討した．なお新型コロナウイルスが感染拡大した期間は，オンライン（ZOOM）によりミーティングを実施し，またLINEグループを作成して，メンバー間で情報を適宜共有した．

打ち合わせ風景（常葉大学）

ZOOMミーティング（産学官連携）

LINEグループによる情報共有

2.3　復興支援活動

台風15号による豪雨災害により活動が休止していた時期には，静岡市葵区「オクシズ」の復興支援として大学祭で清沢の特産品「清沢式ぶっかけレモン」を販売し，売上金全額を静岡市に寄付した．後日，募金活動を行った報告を行い，静岡市長より感謝状が贈られた．

「オクシズ」復興へ
常葉大生が義援金
静岡市に

常葉大経営学部の学生が15日、台風15号による豪雨災害で被害を受けた静岡市葵区の中山間地「オクシズ」の復興支援として、5日の同大学園祭で行った募金活動の浄財5472円を市に寄付した。学生が市役所静岡庁舎を訪れ、前田誠彦葵区長に現金を手渡した。

学生は市のオクシズ人口減少対策事業「Move To オクシズ」の参加メンバー。中山間地への移住者向けのパンフレットを作成するため、10月に葵区の清沢、大川地区を訪れた際、土砂崩れなどで被災した状況を目の当たりにした。「オクシズ復興のために何ができるか」と考え、募金を行った。

学園祭では募金に加え、葵区のきよさわ里の駅で扱う商品「清沢式ぶっかけレモン」30個も販売したという。

同大3年の佐野功汰さん(20)は「活動が少しでもオクシズの復興につながればうれしい」と話した。

前田区長は「中山間地が疲弊すると都市部にも影響が出る。若い力が関わってくれることはとてもありがたい」と感謝した。

募金で集めた寄付金を手渡す学生ら＝静岡市役所静岡庁舎

上図：　大学祭で清沢の特産品「清沢式ぶっかけレモン」の販売風景，および報告会の様子

下図：　2022年11月17日 静岡新聞に掲載（著作物使用許諾申請済み）

3.　研究の成果

(1)　当初の計画

8月～11月：　現地調査・生活ガイドブックへの掲載内容の検討

12月～3月：　アンケート調査の実施・分析，生活ガイドブックの作成

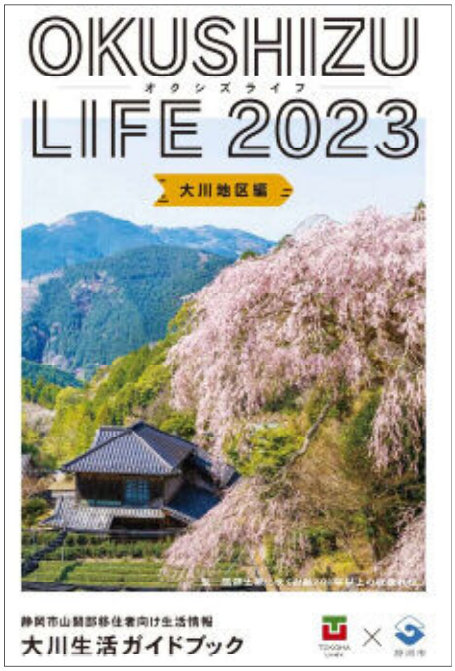
3月下旬：　生活ガイドブックの配布，報告会

(2)　実際の内容

Ａ：研究はほぼ計画通り，実施された．

(3)　実績・成果と課題

実績・成果として，台風15号の復興支援の活動が静岡新聞に掲載され，本学ホームページでも配信がなされた．また，新型コロナウイルス感染拡大の中，オンライン等を利活用してアンケート調査を実施し，得られたデータから大川生活ガイドブックを作成した（3月下旬に完成予定）．課題として，アンケートの回収率を上げるために設問項目の再検討が挙げられる．



大川生活ガイドブック（3月下旬に完成予定）

(4)　今後の改善点や対策

大川生活ガイドブックの配布に加えて，大川・清沢地区への交通網や空き屋に関する情報をインターネットにより積極的に発信することが重要と考えられる．

4.　地域への提言

オクシズの大川と清沢は市街地から30～40分程度と比較的身近な距離にあり，想像されるような不便さは少ないと考えられる．一方で，アンケート調査から同地区での生活に関する注意点やコツなどが明らかになったことから，これらの内容を合わせて情報を発信することが求められると考えられる．

5.　地域からの評価

大川の生活ガイドブックが作成され，さらに復興支援の活動が静岡新聞や常葉大学公式ホームページにより広く情報発信されたことから，地域からの評価は一定程度得られたと推察される．

謝辞

本研究は令和4年度しずおか中部連携中枢都市圏地域課題解決事業「人口減少が続く中山間地の移住者増加策の検討」の助成採択を受けたものです．静岡市葵区役所地域総務課の皆さまをはじめ，インタビュー，アンケートにご協力頂いた大川・清沢地区の市民の皆様，ご協力頂いた方々に謝意を表します．

静岡市版介護予防プログラムの効果検証について

常葉大学 健康科学部 静岡理学療法学科
教　　員：教授　磯崎弘司　講師　中野聡子
参加学生：岩崎南美、濱村心媛、石橋佳奈、小野岳斗
川合夕佳莉、高橋篤哉、宮本壮馬

1. 要約

静岡市では、体を動かして介護予防をめざす「しぞ～かでん伝体操」(以下でん伝体操とする)、脳活性化を図る「ちゃきちゃき体操」二つの静岡市オリジナル体操が考案され広く実施されている。

でん伝体操をより効果的に実践するためには、市民各人が自身の筋肉量や身体機能を把握して、それに応じたプログラムを選択する必要がある。静岡市の元気度測定会に参加した高齢者約 130 人の筋肉量や身体活動量、体力測定の開始時と３か月後のデータを調査した。大学ではこのデータを用いでん伝体操実施者と非実施者の筋肉量や身体機能に与える効果を検証し、以下のことが明らかとなった。

① でん伝体操実施群は、非実施群と比較し有意に年齢・体脂肪率が高いものの筋肉量や歩数計データには差が見られなかったことから、高齢でも歩行機能などの身体機能が維持されている者が多い。
② 両群間において筋肉量・筋肉量変化・歩数計値・運動習慣に、有意な差は無かった。
③ 睡眠の質においては、両群間に差は無く質の良い睡眠がとれている。
④ 食品摂取の多様性においては、両群とも目標値より低値であり、今後の介入の必要性がある。

でん伝体操は、ＤＶＤ配布やＹｏｕＴｕｂｅ配信により、いつでもアクセス可能な状況が整えられている。実施においては地域高齢者の通いの場で行うなど社会参加を含める形で普及啓発が行われていることは評価される。今後、でん伝体操をより効果的なツールとするためには、加齢に伴い生じる身体機能や筋肉量低下に主眼を置きつつも、認知機能や口腔機能、栄養や睡眠を含めた生活全般にわたり継続的な予防に取組めるしくみ作りが推奨される。

2. 研究の目的

静岡市が推奨する介護予防活動をより効果的な実践につなぐため、市民が体操の効果を理解し取り組む必要がある。でん伝体操の実施者と非実施者を比較し、筋肉量や身体機能に与える効果を検証する。これにより、各人に合った介護予防プログラムを提案することができ、将来的には市民がでん伝体操の効果を理解し、各個人に合ったプログラムを選択できることを目指す。

3. 研究の内容

(1)　研究方法

方法は、本年度 65 歳以上の一般高齢者を対象に市内９会場で開催した元気度測定会において、マルチ周波数体組成計測（TANITA:MC-980A-Nplus)、および自立体力測定（羽立工業自立体力測定　形式:Nice People）を実施し、日常生活活動量（オムロン自活動量計:HJA405T）を３か月間使用してもらい、初回と３か月後の各測定項目に対し比較検討を行った。

(2)　対象者

元気度測定会に参加申し込みをした 65 歳以上の市民 114 人を対象とした。対象者には研究についての説明と同意を得た。

(3)　測定項目

測定項目はマルチ周波数体組成計（写真１・２：体重、体脂肪率、脂肪量、除脂肪量、推定骨量、筋肉

量、水分量、ＢＭＩ)、羽立工業自立体力測定（写真３：歩行、手作業、身体調整、姿勢変換)、生活習慣アンケート、睡眠の質を表すピッツバーグ睡眠質問票、食品摂取の多様性アンケート、日常生活活動量（写真４・５）を研究目的に合意した対象者に３か月間使用してもらい、活動量を調査した。

(4)　分析方法

調査データ時は統計ソフトＳＰＳＳを用い多変量データ解析を行い、でん伝体操実施群と非実施群の調査データ（体重、ＢＭＩ、体脂肪率、筋肉量、歩数計測定、体力測定、睡眠の質、食品摂取の多様性）を比較検討した。有意確立は両側５％未満を有意とした。

写真１：体組成計測

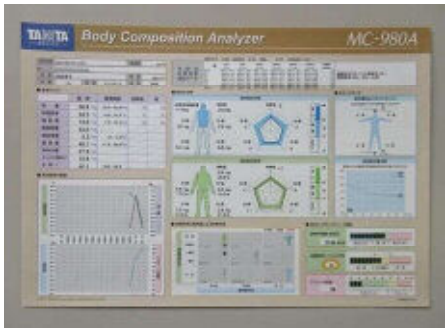


写真２：マルチ周波数体組成計結果表

写真３：自立体力測定

写真４：アンケート記入

写真５：活動量計

4.　研究の成果

(1)　当初の計画

元気度測定会は地域リハビリテーション推進センター・はーとぴあ清水・用宗老人福祉センター・鯨が池老人福祉センターなど９会場で実施予定。参加者は 130 名の予定。

(2)　実際の内容（Ａは予定どおり、Ｂは一部修正、Ｃは中止など）とその理由

Ｂ　一部修正

新型コロナウイルス感染状況を鑑み測定会への学生の参加ができなかった。学生は学内でデータの整理や入力を行った。

(3)　実績・成果と課題　表１

参加者のうち、１回目と２回目のデータに欠損値のない 103 名を解析対象とした。でん伝体操実施群は 50 名（男性 10 名)、年齢 76.5 歳、BMI は 22.7Kg/m²であった。でん伝体操非実施群は 33 名（男性 12 名)、年齢 73.6 歳、ＢＭＩは 22.2Kg/m²であった。でん伝体操実施群は非実施群と比べて有意に年齢が高かった。

体組成データでは、でん伝体操実施群は体脂肪率 29.6%、筋肉量 35.4Kg、３か月後の筋肉量が維持・増加しているものは 28 名（56.0%）であった。一方、非実施群では体脂肪率 25.8%、筋肉量 38.1Kg、３か月後の筋肉量が維持・増加しているものは 17 名（51.5%）であった。でん伝体操実施群は体脂肪率が有意に高かった。(図 1-2：でん伝体操実施群/非実施群の筋肉量・体脂肪率の男女比較)

活動量計の歩数データでは、両群ともに通常歩数は約 5,500 歩/日、階段は約 80 歩/日、早歩きは約 2,100 歩/日であり有意な差は見られなかった。

食品摂取の多様性ではでん伝体操実施群が 3.7 点、非実施群 3.5 点で有意な差は見られなかった。食品摂取の多様性は７点が目標であるとされているが（熊谷ら,公衆衛生学会, 2003)、大きく下回る結果であった。

睡眠の質を表すピッツバーグ睡眠質問票では、でん伝体操実施群で 5.6 点、非実施群では 4.9 点と有意な差は見られなかった。６点以上で睡眠の質が悪いと判定されるが、本データからは睡眠の質が保たれている集団と考えられる。全体では睡眠時間は 6.7 時間であり、睡眠の質を落とす中途覚醒の原因としてはトイレ（69.9%）が最も多かった。

表１：でん伝体操実施群と非実施群の比較

	でん伝体操実施群 (n=50)	でん伝体操非実施群 (n=33)	p
Age(years)	76.5± 5.5	73.6 ± 5.6	**0.02**
Sex(men)	10(20.0)	12(36.4)	0.10
Body mass index (Kg/m^2)	22.7 ± 3.5	22.2 ± 3.6	0.54
体脂肪率（%）	29.6 ± 7.7	25.8 ± 8.1	**0.04**
筋肉量	35.4 ± 6.2	38.1 ± 7.1	0.07
筋肉量変化（維持・増加）	28（56.0)	17(51.5)	0.47
歩数計　通常歩数（歩/日）	5463.7±2401.4	5514.8±3160.4	0.94
階段（歩/日）	83.6±100.3	89.7±74.5	0.81
早歩き(歩/日)	2092.3±2069.4	2206.3±2664.6	0.09
運動習慣　（週１回以上あり）	45(90.0)	28(84.8)	0.88
社会参加 自治会ボランティア活動(週1回以上あり)	41(82.0)	17(51.5)	0.37
周囲とのお付き合い（週1回以上あり）	35(70.0)	25(75.8)	0.93
ピッツバーグ睡眠質問票(点)	5.6±3.7	4.9±3.6	0.23
食品摂取の多様性合計点数(点)	3.7±2.1	3.5±2.4	0.75

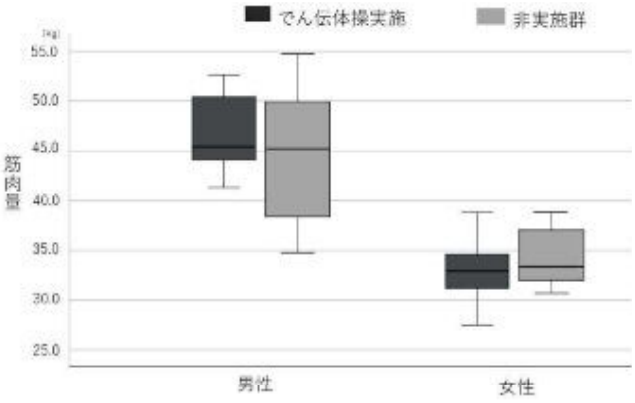


図１　筋肉量の比較
（でん伝体操実施群 vs 非実施群）

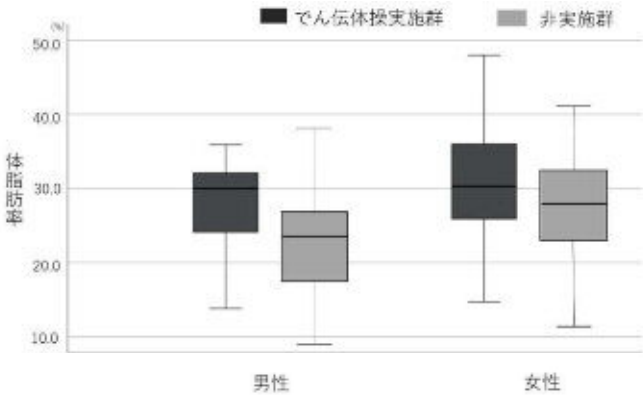


図２　体脂肪率の比較
（でん伝体操実施群 vs 非実施群）

5. 地域への提言

でん伝体操実施群と非実施群の比較では、でん伝体操実施群の年齢が有意に高いものの筋肉量や歩数計データには差が見られなかったことから、高齢でも歩行機能が維持されている者が多いことが明らかになった。でん伝体操をさらに効果的な取組とするには、加齢に伴って生じうる身体機能や筋肉量の低下の予防を目的として各個人に合わせた負荷量を設定し、幅広い対象者が継続的に取り組める仕組み作りが推奨される。歩行機能の維持はフレイルや要介護への進展を予防するのに重要である。本データより、でん伝体操は高齢であっても取り組むことができ歩行機能など身体機能の維持に寄与する可能性が考えられる。また、でん伝体操実施群ではＢＭＩは標準値であるものの体脂肪率が高いことから隠れ肥満に該当する者が多いことが推定される。ただし、女性の割合が高く年齢が高い群であることを考えると女性の脂肪量が維持されていることは余命延長に良い影響を与えることから（Seino S, Journal of Cachexia, 2022)、体脂肪率が高いことを是正するものではないと考えられる。

食品摂取の多様性アンケートは、７点が目標であるが(熊谷,日本公衆衛生雑誌, 2003)、両群ともに３点台と先行研究の他市の地域住民と比較して低値であった。食品摂取の多様性は口腔機能とも関連し(永井, 日本公衆衛生雑誌, 1991)さらには身体機能へと影響を与えることから食品摂取の多様性への取組が求められる。静岡市ではすでに歯っぴー☆スマイル体操を作成し口腔機能向上への取組が行われている。

睡眠の質を表すピッツバーグ睡眠質問票では、両群ともに睡眠の質が保たれていることが示された。睡眠時間の短縮や睡眠の質の低下からうつ症状を発症しやすくなり（榎本,老年医学, 2007)、高齢者のうつ症状は身体機能低下に関連することから睡眠の質に対する取組は重要と考える。今回の検証では睡眠時間は保たれているものの、中途覚醒の理由として約７割に夜間排尿の症状があったことから排泄ケアに対する取り組みも重要であると考えられる。

でん伝体操というツールは、これまでに体操ＤＶＤを配布したりＹｏｕＴｕｂｅで動画配信したりと、いつでも誰でもアクセス可能な状況が整えられている。また、通いの場で実施するなど社会参加を含める形で普及啓発が行われてきていることは評価される。静岡市版介護予防プログラムとしてさらに効果的な取組とするためには、加齢に伴う身体機能や筋肉量の低下予防に限定せず、認知機能、口腔機能のほか排泄機能、栄養や睡眠への課題にも着目し高齢期の介護予防が切れ目なく一連のプログラムをもって地域活動につながる仕組みを設けていくことが重要と考える。そして運動、認知、口腔や栄養等の各取組が相乗して効果的なものとなるよう市の専門職が横断的な仕組みや連携の基盤上で取り組む体制づくりが必要である。また今回の参加者は自発的に測定会へ申込を行った、言わば健康意識の高い対象者であったと推測される。今後は無関心層を対象者として健康意識の高まりや行動変容につながるよう多角的に取り組める事業展開が大きく期待される。

6. 地域からの評価

測定会終了時の参加者アンケートでは68％の人に「測定会を機に健康意識に変化があった」との回答があり「１回目の測定後は筋肉量を意識して運動を取り入れている」などの声が聞かれた。また、運動の継続性を目的に各参加者に活動量計を貸出したところ、ウォーキングの取り組み方や毎日の歩数への意識が高まったなど、活動結果が手元で見える化されることは健康意識を高め行動変容につなげることに有効であったと考える。取組の効果が手軽に見える化される環境整備を進めていく等今後の事業に期待したい。

新たな働き方に対応した移住促進施策

常葉大学　経営学部　小豆川ゼミ・研究室(3年)
造形学部安武研究室・未来デザイン研究会（2年）
教員：教授　小豆川裕子　教授　安武　伸朗

参加学生（17名）
経営学部：石井優・江原ななみ・金原由真・栗原陽斗・寺田侑加・西川佳織・真野瑠菜・
村松 佑亮・村松梨菜・山本蒼空
造形学部：青島合花・櫻井美吹・高島貴美子・長島彩音・野毛瞳・石上華凪・小谷紗和

1.　要約

静岡市では現在、テレワーク等による新たな働き方に対応した移住促進策を推進中である。これまで常葉大学小豆川ゼミでは令和元年度事業『2020年版 静岡市まちごとテレワークマップ』の制作によって市内コワーキングスペースの特徴を把握。令和2年度事業では、静岡を訪れるコワーキングスペース利用者がまちを楽しみ、まちの魅力を発見し、生活の便利さを知り、交流していただくことを目的に、『2021年版 静岡市まちごとテレワークマップ』を制作した。令和3年度事業では「静岡ワーケーション[1]」として、学生らしい発想と企画でプロモーション施策として、動画制作を行った。

令和4年度は造形学部と連携し、これまで取り上げてこなかった静岡市清水区の清水・三保・蒲原エリアに焦点をあて、「静岡ワーケーション」をさらに展開する。プロジェクトのメンバは、デスクリサーチ、現地調査・取材を実施し、今後移住促進や発信拠点として期待される地域資源やコワーキングスペースを紹介する冊子を制作した。具体的には、静岡らしいワーケーションの在り方を検討し、ペルソナ[2]を設定し、マーケティング施策、全体コンセプトの検討を行った。あわせて3グループに分かれて各エリアの取材先を検討し、アポどり、写真撮影・取材を行い、レイアウトデザイン制作を実施した。全プロセスにおいて、地域おこし協力隊の小林大輝氏にアドバイスをいただきながら、移住者の潜在・顕在ニーズにアピールできる冊子を目指した。今後は、冊子をもとに各種プロモーション策に活用いただく。

2.　研究の目的

静岡市の交流人口を増加させ、移住・定住促進策の一助とすることを目的に、学生らしい発想と行動力を活かし、コロナ禍後普及拡大が進む新たな働き方「テレワーク」「ワーケーション」に対応した冊子制作を行う。

3.　研究の内容

令和元年度～令和3年度の新たな働き方に対応した移住促進施策に資する実績・成果を踏まえ、これまで取り上げてこなかった静岡市の清水・蒲原エリアに焦点をあて、デスクリサーチ、現地調査・取材を実施する。ワークショップ等でモデルコースをまとめ、地域の発信拠点として期待されるコワーキングスペースや地域資源を紹介する冊子制作を行う。成果を踏まえ、今後は、WEB・SNS発信、イベント開催等に活用いただく。

(1) スケジュールと活動内容

プロジェクトのスケジュールと活動内容は以下のとおりである。

2022年～2023年
8月～10月：プロジェクト全体の目標の共有、進め方に関する検討
10月～11月グループごとにターゲット、コンセプト等マーケティング施策、ペルソナの検討
11月～2月：取材地の選定・交渉、取材・撮影、追加取材
1月～3月：インタビューおこし、文字編集、レイアウト構想、印刷版下データ制作、版下校正、
報告書の作成、印刷

---

[1] ワーケーションとは、ワーク（仕事）とバケーション（休暇）の造語である。「テレワークを活用し、普段の職場から離れ、リゾート地等の地域で普段の仕事を継続しつつ、その地域ならではの活動を行うことである」（ワーケーション自治体協議会、2019 ）

[2] ペルソナ：想定する架空のユーザー像・人物モデルを指す。

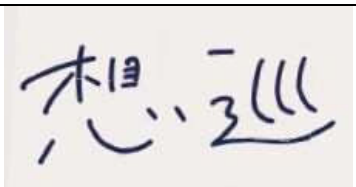
(2) マーケティング施策

学生が検討した３つのペルソナとマーケティング施策は、図表1のとおりである。

図表1　３つのペルソナとマーケティング施策

ペルソナ	ユウキ	マユミ	ヒロキ
セグメンテーション・ターゲティング			
コア・ターゲット／ サブ・ターゲットなど	20代後半・男性・独身・学生時代に運動部に所属していた スポーツ観戦が趣味 都会(東京、神奈川、愛知)に居住 仕事はデスクワークが中心最近在宅ワークを行う日が増えた 都会ではない場所でゆったりと過ごしたい	35歳女性、フリーランスのWebデザイナー（年収410万円） 夫は37歳、小学校教師（年収460万円） 子供（小学校低学年）がいる家族	45歳独身（一人暮らし） IT企業のエンジニア（年収600万円） 真面目な性格で、仕事で息詰まることが多い ワーケーションは過去に５回体験済み 文化や歴史を学ぶことが好きで、よく博物館や史料館に行く 写真を撮ることが趣味で、訪れた歴史的名所やお城の建築などを撮影する 「温故知新」の精神
施策テーマ	ふらっと寄れるアクティブ静岡	しずおかの地でゆたかな想像力を育む	歴史ある静岡で、仕事に新たな価値観を
施策概要	東京や愛知県、神奈川県からのアクセスが良く、気軽に立ち寄れる静岡で普段できないアクティブな体験を提供する。また、ワーケーションをきっかけに繰り返し静岡に訪れてもらうことや同僚と一緒に来てくれることを期待する	家族での3日間のワーケーション。『ゆったりワーク×海で食育×人とのふれあい』の3つの軸で、子供と一緒に学びを深めることを目的とする。子供同士の交流の場や自然とのふれあいができるスポットを紹介する	（背景）時間と場所を問わず、仕事ができるテレワークを実施する人が増加 静岡ならではの魅力を発信 Wi-Fi環境が整ったコワーキングスペースを紹介
◇ターゲットのニーズ	自宅、カフェやコアワーキングスペースではないところで仕事がしたい 新しくハマれる趣味がほしい 学生時代のように活発に活動したい	顕在ニーズ 子供に自然や交流の場で学んでほしい。 潜在ニーズ 子育て中でも、ゆったりとした自分の時間がほしい。 自分1人の時間でゆっくりワーケーションしたい	文化や歴史から得た学びを仕事に生かす たまにはネットから離れて自由に過ごしたい 静かで落ち着いた空間
◇施策内容	富士山を見ながら楽しめるマリンスポーツ 蒲原の昔ながらの街並みの中でサイクリング トライアルパーク蒲原でサウナ 三保ビーチステーションや燕之宿でのワーケーション	『話す・食べる・見る』などの体験に焦点を当てて、五感を刺激するような紹介をする	清水・三保・蒲原エリアのワーケーションスポット、宿泊施設の紹介（蒲原宿、菅原宿場まつり、みほしるべ、燕之宿） 新しいワークスタイルの提案
◇施策のもたらす効果	体験を通して地元の人との新たな出会いと交流が生まれる 非日常を楽しむ 運動をすることによってストレスを解消 同僚を連れて再度訪れる	ターゲットが静岡に興味を持ってワーケーションに訪れる さらに定期的に来たいと思わせる 地産地消促進	「静岡に知人がいる」「旅行に来る」人を増やす 静岡で移住することに興味を持ってもらう

＜全体コンセプト＞



しずおか　清水・三保・蒲原
歴史に、自然に、想いを巡らす穏やかワーケーションのススメ
新しい発想や、見落としがちな好奇心を取り戻そうと思った時、
この清水の街で想いを巡らせてみてはどうでしょう。
美しく穏やかな自然や食の恵、人の思いが詰まる歴史に囲まれながら、
新しい働き方を試してみませんか。
きっと素晴らしい出会いが待っています。

4. 研究の成果

(1) 当初の計画　2022年8月より2023年2月までの期間で、冊子制作を行い、WEB・SNS発信、イベント開催等でさらなる発信を行うという内容であった。

(2) 実際の内容　B:一部修正。冊子を静岡市移住支援センター等で多くの方に手にとっていただけるように、マーケティング施策、コンセプト設定に十分時間をかけたこと、また冊子のコンテンツの充実のためA4・中綴じ・12ページ・４C/４Cとしたため、WEB・SNS発信、イベント開催等でさらなる発信を行うことは冊子完成後となった。

(3) 実績・成果と課題

① 実績・成果

静岡においてこれまで取り組んでこなかった清水・三保・蒲原地域の移住促進策として、学生の視点で魅力の発見を行い、冊子の企画・制作を行った。冊子は2,000部印刷を行い、今後静岡市移住支援センターをはじめとして、冊子に掲載されたコワーキングスペース、関連施設に配布を行い、各種プロモーション施策に役立てていただく予定である。

経営学部・造形学部の学生があげた学びの例は以下のとおりである。

- 造形学部の学生の感性や考え方、行動力が素晴らしくとても刺激になった（経営学部）
- 仲間内で話し合い、計画を立てていく中で、絞り込むことの大切さ、正確な判断をするための綿密な調査をすることの重要性に気いた（経営学部）
- 三保と蒲原を深く知る良い機会になった。地域住民へのインタビューも初めての経験で、学外の人と関わるという、授業内ではあまり経験できないようなことも学べた。造形メンバー全員でレイアウト作業をしたが、全員で作風を合わせるための工夫や報告連絡相談を怠らないなど、デザイナーの仕事のような経験もできた。難しかったが良い勉強になったと感じる（造形学部）
- 大人数で作業することで、情報共有がいかに大切かということを学ぶことが出来た。報連相をこれからも意識するようにしたい（造形学部）
- 他学部との共同作業の難しさ・誰にこの冊子を届けるのかの選定・全体的なプロジェクトの進め方を学んだ。各スケジュール管理や先方とのやり取りなどの基礎的な面も改めて学ぶことができた（造形学部）

② 課題

清水地域におけるワーケーション推進の課題として、学生からは、学生自身のワーケーションの理解不足もあるが、清水・三保・蒲原地区のワーケーションの要素の未成熟さ、現場の地域自体がワーケーションを受け入れる体制を作りきれていないこと、観光雑誌との差別化の難しさがあげられた。たとえば、三保エリアは「三保の松原」という観光地があるのに飲食店が少なく、活気がないことがある。プロジェクト遂行の課題としては、取材先・スポット選定に時間がかかり計画がやや遅れたこと、デザインを専門とする造形学部にデザイン・レイアウト段階で造形学部の負担が重くなってしまったことが指摘された。

(4) 今後の改善点や対策

ワーケーション推進の今後の改善点や対策としては、「もっと受け皿を大きくして、様々な施設や店を呼び込むべき」「魅力が詰まった地域なので、もっとたくさんの人にその魅力が伝われば良いと思う。SNSを通して若者の関係人口を増やすことも必要」など施設等の誘致とプロモーション施策があげられた。プロジェクト遂行の今後の改善点や対策としては、「得意分野を明確にし、作業分担を行うことで、効率化を図る」「フィールドリサーチをはじめに全員で行い現地の雰囲気や課題点を全員で見極める」「学生間でもっとコミュニケーションをとること」など、役割分担の方法や情報共有・コミュニケーションの徹底などがあげられた。

5. 地域への提言

学生が検討した地域への提言例は、以下のとおりである。

- ワーケーションという言葉の認知をもっと広げることで、協力してくれる施設や店舗、企業が増えプロジェクトの進行もスムーズになる。
- ウラレナ近辺は多くの粗大ゴミが放置されていて寂れた雰囲気を感じた。このゴミを取り除くことを最優先にした方がよいと思った。
- 三保の松原や料理の美味しさ、海の美しさなど、魅力が沢山ある地域だが、認知度の低さが課

題。魅力を沢山詰め込んだ冊子や広告など、建物を増やしたり新規事業を考えること以前に、まずは「知ってもらう」ことに重点を置いてみてはどうか。

6.　地域からの評価

地域からの評価は以下のとおりである。

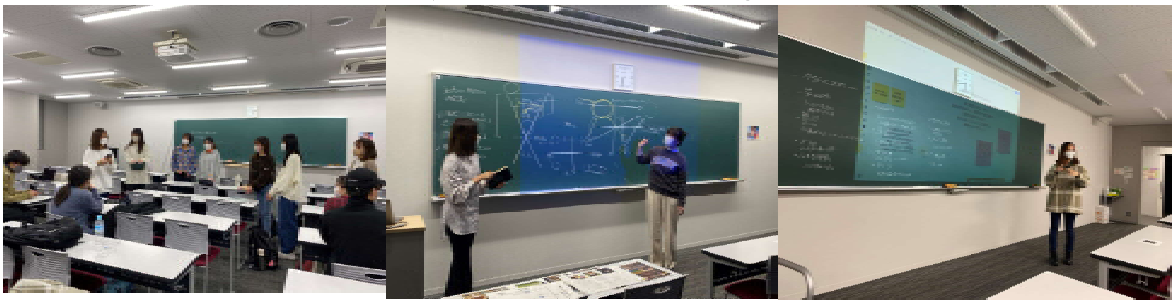
この度は、「新たな働き方に対応した移住促進策」について調査いただきましてありがとうございます。政府として、「デジタル田園都市国家構想」において、『「転職なき移住」の推進など地方への人材の還流』を掲げており、地方移住への関心が非常に高まっています。本市清水区の魅力を首都圏居住者等に発信するとともに、ワーケーションを促進するための冊子を制作していただきました。

本調査の成果物は、本市への「移住の促進」や「関係人口の創出」等の取組に大いに活用させていただきます。（静岡市企画局企画課　移住・事業推進係）

＜謝辞＞

本事業は、新型コロナウイルスへの感染対策を行いながら実施しました。取材・撮影にご協力いただいたすべての皆様には、心より御礼を申し上げます。あわせて静岡市地域おこし協力隊小林大輝氏には、専門のお立場から多大なご支援・ご指導を賜りました。重ねてお礼を申し上げます。

図表2　ディスカッション風景



図表3　取材風景

図表4　冊子：表紙と誌面例

田代地区を環境教育の場とすることに向けた取組

常葉大学 健康プロデュース学部　こども健康学科
教　　員：准教授 中村俊哉

１要約

島田市北部に位置する田代地区は、第二東名高速道路建設に伴う発生土の処理及びその後の土地利用を行っている。また、ワシタカ類が生息していることもわかり、生物多様性保持のために、努力や工夫、調査等がされている。そこで、田代地区を対象とした生物多様性や自然環境保全の取り組み教材としたプログラムを地域の小学生に行うことで、人と自然の関りや生物多様性について考える機会を与えたい。まずは、9月までに、小学生を対象とした生物多様性や田代地区の取り組みについての調査を行った。この調査結果を基に9～12月にかけて、小学生を対象にした環境プログラム作成とリーフレット作成を行った。12月9日、川根小学校で、作成したリーフレットを基に、環境プログラムを実施した。1月に作成したリーフレットを島田市内小学校6年生向けに配布した。

２研究の目的

生物多様性を保つように努力している人や行政などと自然との関係を考えるために適している島田市田代地区を教材化した環境教育プログラムの開発・実践を通し、その効果を検証する。

３研究の内容

作成したリーフレット（自然と人の共存を考えよう島田市田代の生き物と人々）を、図1～4までに示した。実際の田代の写真や生態系を利用して作成した。裏表紙には、授業後に児童が感想等を記入できるスペースを設けた。リーフレットは、9月までの調査を基に、9～12月にかけて作成した。

図1　田代地区の概要（表紙）

図2　田代地区の生態系

図3　田代地区の保全

図4田代地区のこれから（裏表紙）

2022年12月9日に、川根小学校の5年生を対象とした授業を行った。総合的な学習の時間のまとめの位置づけとして行った。授業後、ワークシートの記述をみると、自然と人間の共存についての内容や自然を人が考えて守ったり、工夫したりしていることの内容が多かった。このことから、人と自然の共存についての理解が深まったと考える。

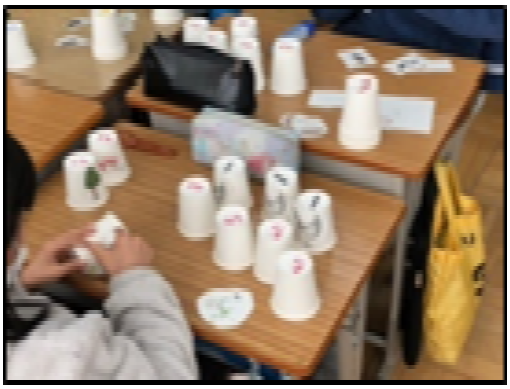


写真1　紙コップに生き物の絵を貼る様子

写真2　紙コップの生態系ピラミッド

写真3　生態系ピラミッドを崩した所

写真4　ワークシートに記入している所

写真4　島田市職員の方からのメッセージ

おおまかな授業内容
＜１時間目＞ １．島田市内に、タカがいたことを伝え、タカの生きるために必要な広さや生き物の量を考え、生き物は他の生き物と関わり合いながら生きているという「生態系」の意味を確認する。

２．紙コップを利用して生態系ピラミッドを作る。

３．紙コップの生態系ピラミッドの紙コップを抜かせ、ピラミッドを崩させ、実際の生態系について考えさせる。

※1時間目の授業は、岩谷美苗「『生態系紙コップピラミッド』崩し」を行った。

＜2時間目＞

４．高速道路の残土の話をし、自分たちだったらどうするかグループで考え、発表する。

５．田代地区の取り組みをリーフレットから読み取る。

６．生態系を今も守っている環境政策課の職員の方の話から、田代地区のこれからの思いを聞く。

７．ワークシートに自分の考えをまとめる。

４研究の成果

(1)当初の計画

生物多様性を保つように努力している人や行政などと自然との関係を考えるために適している島田市田代地区を教材とした環境教育プログラム開発と授業で行うリーフレットを作成し、実践を行う。

(2)実際の内容（Ａは予定どおり、Ｂは一部修正、Ｃは中止など）とその理由

1.リーフレット作成・・・Ａ

・計画していた写真や田代地区での生態系ピラミッド図が作成できた。内容も適切だったと考える。

2.授業実践　　・・・Ａ

・島田市立川根小学校のみであったが、授業実践ができた。ワークシートの記述内容からも効果があったと考える。

・学級担任の先生との話し合いで授業内容が深まり、本来クラスが行っている方法も取り入れることができた。

(3)実績・成果と課題

島田市を担う子ども達に向け、地域の田代地区を教材として、「自然と人の共存を考えよう島田市田代の生き物と人々」というリーフレット作成と授業を行った。このリーフレットを基に他の小学校でも授業実践してもらえるようにしていくことが必要であろう。

(4)今後の改善点や対策

環境政策課と園・学校への繋がりがより深まっていくとよいと考える。授業実践は、学級担任と話し合うことが必要であったため、効果的な授業を行うためには時間確保が必要である。

５地域への提言

島田市は自然豊かであり、その素晴らしい自然を残していくためにも様々な発達段階、多様な視点からの授業開発が必要と考える。

６地域からの評価

授業については、今までの学習があったため、児童の理解が深まったようだとのお言葉をいただいた。

「人生100年時代、高齢者の地域活動・社会参加を促進したい！」に関する研究

静岡英和学院大学 人間社会学部 日本語学ゼミ
教　　員：専任講師 大槻知世
参加学生：なし

１ 要約

本稿は、「静岡中部連携事業中枢都市圏地域課題解決事業」の静岡市の課題に応募し採用された、静岡英和学院大学日本語学ゼミの研究・調査活動について報告するものである。

当該研究は、方言を通して地域の人々の交流を活性化することを最終的な目的として、当初の計画では5回ほどの方言調査と、シニアの方言サークルとの協働を予定していた。結果的に、実施方法を変更して部分的に実施するに留まった。

２ 研究の目的

本研究は、静岡市の掲げる課題の一つ「人生100年時代、高齢者の地域活動・社会参加を促進したい！」への提案から始まっている。現状では、市の高齢者が収入を伴う仕事に参加する割合が増加しているのに対して、地域活動・社会活動への参加は伸びていないことが指摘されている。ここ数年は新型コロナ禍も相まって、高齢者の地域活動への参加は減少の一途にあると想定される。

報告者は、参加へのモチベーションを高めるために日本語学ゼミの活動が資することができるのではないかと考えた。具体的な活動の内容は次節「３ 研究の内容」に記す。

３ 研究の内容

課題解決の手掛かりとして、本ゼミは、方言調査を通した世代間およびシニア同士の交流、方言を用いたシニア層とゼミ生との協働を提案した。

一般に、特にシニア世代で心身の健康、認知機能を高い水準で保っている方には、三つの要因：教育、自己効力感、運動が認められるという。このうち、自己効力感について、高齢者にとっては、自分が経験してきたことを下の世代に伝えること、それにより下の世代が育つのを感じること、が生きがいにもなりうると考えた。

また、我々が経験的に知っているように、人と話をすること自体がケアになる場合がある。人と話したいという欲求は地域活動に参加するモチベーションになりうる。

具体的な活動内容としては、地域の高齢者に学生が方言を教えていただく、方言サークルの方々に講演、方言劇や遊び歌を通して協働していただく、といった計画を立案した。

こうした方言調査や方言サークルとの協働によって、次のような効果を見込んでいた。すなわち、シニア側にとっては、知識と経験を伝えることで自己効力感を高め、受容されている感覚を得る。地域の若者や同世代と知り合う。幼い頃からのルーツを見直すことで、地域社会とのつながりを再発見する、等の効果が期待される。

一方、ゼミの学生側では、地域の人との関わりを広げる。地元の風習やことばの特長を知る。アイデンティティと誇りを意識する。地域社会への貢献を意識する。傾聴という対人能力を養う、等の効果が期待される。

調査について、今年度はワクチン接種も進み、一定以下の規模の対面調査が可能になると思われたため、参加希望者の人数に応じて、対面調査・オンライン調査など、適切な形式を選び実施する予定であった。

4 研究の成果

(1) 当初の計画

当初は、次のような調査を計画していた：

A1　【井川調査】日本語学ゼミ所属の学生10名程度の参加見込

A2　【井川調査】市内の公民館を2～4回程借りて対面（もしくはオンライン）調査を行う

A3　【井川調査】調査協力者は4～8名を予定（1回の調査につき調査協力者は1～2名）

A4　【井川調査】井川方言の伝統的なすがたを記録し冊子にする

B1　【かたかご会】かたかご会の方々に講演依頼

B2　【かたかご会】かたかご会とゼミ生との協働（方言によるワークショップなど）

(2)実際の内容とその理由

実際には、当初の計画のA，Bいずれも予定通りに実施することはできなかった。新型コロナ第7波のピーク後直ちにゼミ生複数名で井川地域に赴きグループ調査を行う予定だったが、担当教員の多忙を理由として実施に至らなかった。結果として、A1，A2は中止、A3は実施方法を修正、A4に部分的に実施となった。A3はゼミメンバー複数名での臨地調査ではなく、教員による隣地調査・自然談話観察に変更して行なった。A4については方言の文法記述の内容を深化することはできたが、文法体系の全体を捉えるには至っていないため、冊子は発行しなかった。

図 1　井川地域各所で自然談話観察を行なった

Bについては、大学の後期授業期間中の実施を考えていたが、新型コロナ第8波が始まり、ピークアウトを待って実行を目指したものの機を逃した。結果として、B1，B2ともに中止である。

(2) 実績・成果と課題

ここでは、実施したA3，A4について述べる。教員が井川地域で行なった臨地調査では、井川地域の若年層・中年層・高年層の方々の自然談話観察を行なった。いずれも短時間での観察であり、十分な量とは言えないが、現在の葵区井川地域における言語運用状況の一端を聴取することができた。概括すると、若年層・中年層の自然談話では方言形がほとんど見られなかった。高年層も、若年層・中年層との談話においては方言形がほとんど見られなかったが、方言について尋ねると難なく方言を話すことができた。

上記の観察から予想されるのは次の2点である。すなわち、①年代間の横断的なコミュニケーションにおいては、方言に比べてより多くの人が理解できる共通語が選択されている。②高年層は方言を使用して育ったものの、下の年齢層とのコミュニケーションでは優勢な共通語を使うようになっており、世代間の方言の継承は行われなくなりつつある。以上の予想は、日本各地の諸方言において予想されていることと同様である。

本研究の自然談話の高年層話者は、勧誘文において動詞の未然形を用いるなど、伝統的と思われる方言の特徴を保持している。

(4)今後の改善点や対策

多人数での対面調査を行なうことが憚られる場合、調査人員を絞って調査を実施する。調査は対面調査に拘わらず、状況に応じて、郵送によるアンケート調査なども実施を検討する。

方言サークルかたかご会との協働については、定期的に開催されている例会への参加頻度を挙げて、連携体制を強化したい。

5 地域への提言

精神的な充実をもたらす活動が必要であると考える。市の高齢者は、概ね「収入を伴う仕事に従事しているグループ（A)」「地域活動・社会活動に参加しているグループ（B)」「AでもBでもあるグループ（下図C)」「AでもBでもないグループ（D)」に分けることができる。

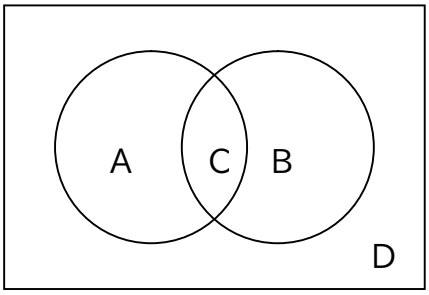


図2 4つのグループに分けられる

現状では、Aが多くBが少ないため、Bを増やす効果的な方法が求められている。Bを増やすためには、主に、(1) Cを大きくする（AかつBを大きくする）ほか、(2)DからBに変わる方を増やすことが考えられる。長期的には（２）を目指したいが、短期的には既に何らかの活動に参加している人に地域活動にも参加してもらう(1)のほうが成果を得やすいものと考えられる。

そのためには、精神的な高揚感や充実感、たとえば、学習により新たな視野（忘れていた知識を再活性化することも該当すると考える）が開ける楽しさ、自分の経験や知見を他者と共有することで高められる自己効力感、などが有効であると思われる。

6 地域からの評価

今年度の本研究課題は計画通りの実施に至らず、地域の方々との積極的な交流の機会をもつことができなかった。したがって地域からの評価を得られなかったため、本項は該当しない。

「「和菓子バル」イベントを通じた、大井川川越遺跡のＰＲ手法の提案（静岡県島田市）」に関する研究

静岡英和学院大学　人間社会学部畑ゼミ（日本古典文学）
教　　員：教授　畑　恵里子
参加学生：加藤義大、藤巻祐太、水上遥花、三輪碧、
奥村悠里、数山璃空、杉山佳大、朝原光音、
山本ひかり、栗島理奈子、
長倉珠稀、小田島玲菜、坂本蓮希、寺田菜々美、
林優心、中川槙

１ 要約

静岡県島田市には国指定史跡の「大井川川越遺跡」がある。大井川を境として、島田宿と金谷宿とを川越人足が繋いできた、いわば東海道文化のひとつであり、近世の川越制度を伝える国内唯一の施設である。当時は主要な交通網であったはずだが、現在、その認知度は高くない。

大井川川越遺跡では、こうした背景より、数年前から「和菓子バル」を開催して、新たな客層の来場者の獲得を目指してきている。コロナ以前（令和元年度）は約4,000人、コロナ以後（令和２年度）は約1,600人、続いて（令和３年度）は約1,000人の来場者があった。

そこで、令和４年度「和菓子バル」では、川越人足体験や俳句創作体験などを通じて、本事業に参画した。

２　研究の目的

静岡県島田市の「大井川川越遺跡」や「川越人足」などの効果的な周知を目的としている。

３　研究の内容

浮世絵（例：図１）や近世文学などに描かれている大井川近隣の東海道文化の実態の再確認と、効果的な周知活動とが、主な内容である。

４　研究の成果

（１）当初の計画は、以下の通りである。

１　島田宿大井川川越遺跡について、島田市内で過去実施された調査やマップ等の分析を行い、課題を整理する。

２　浮世絵の「富士山と大井川」を踏まえたマップを作成する。学生の作成した俳句等を組み込み、市内でチラシ、ポスター、ポケットティッシュを配布する。「和菓子バル」で学生から配布する。

３　イメージキャラクターを新規開発して周知をはかる。島田市商工会議所７０周年祈念事業や牧之原市の地域課題解決事業等で協力実績を有する、静岡県出身の少女漫画家の花森ぴんく氏へ依頼する。(無償協力調整済)。

４　島田市博物館をはじめ集客力のある蓬莱橋やふじのくに茶の都ミュージアム、JR金谷駅、大井川鐵道、金谷日切地蔵尊等と協働して認知度の向上をはかる。

５　上記情報を島田市公式ＨＰやSNS、新聞等で情報発信する。

図１　錦絵「東海道川尽大井川之図」（天理大学附属天理参考館蔵）
備考：天理大学附属天理参考館より使用許可済。

（２）実際の内容は、以下の通りである。
・実施内容：「Ｂ（一部修正）」に相当する。
・理由：上記１、２の一部、５は遂行したが、上記２の一部、３、４は遂行に至らなかったため（協議の過程において、花森氏へは本依頼をするに至らなかったが、本事業への全面的理解を得てきた点は変わらないことを付言する）。
１　島田市博物館周辺のフィールドワークを行った上で、島田宿大井川川越遺跡について、島田市内で過去実施されたイベント等の分析を行い、課題を整理した。
２　本学の有志の男子学生が、島田市博物館で保存されている連台を担ぐことによって川越人足を再現して、「和菓子バル」の来場客に試乗体験をしてもらった（図２）。
３　「和菓子バル」の来場客に、ランダムにキーワードを引いてもらい、川柳や俳句を作って書いてもらう企画、「運と実力で作り出せ！ランダム名句MAKE」を実施した。その際、SNS投稿＆Instagramをフォローしてくれた来場客には、手作りの和柄のしおりや市販の茶飴などをプレゼントした（図３）。
４　「和菓子バル」では、射的体験や和菓子販売の対応を、他大学学生と協力して行った（図４）。
５　上記情報を島田市公式ＨＰや静岡英和学院大学のＨＰやＳＮＳ、静岡新聞（令和４年１１月５日朝刊）等で情報発信した。

（３）あらたな実績・成果・課題としては、以下のとおりである。
１　当初の予定にはなかった「川越人足」の再現という参画型イベントが実施できたことによって、本学学生の活動を直接地域住民に直接伝えることができた。
２　当初の予定にはなかった「運と実力で作り出せ！ランダム名句MAKE」という参画型イベントが実施できたことによって、本学学生の活動を直接地域住民に直接伝えることができた。
３　和菓子バルには、４年ゼミ学生全３名（野田真衣、柴治親、沢田明日香）も臨時に参画して、１～４年生が一体となって本活動を周知できた。

（４）適切であった点や改善点、対策等としては、以下のとおりである（引用：令和４年度しずおか中部連携中枢都市圏地域課題解決事業発表会資料、および、和菓子バル直後の学生の反省から）。
１　「運と実力で作り出せ！ランダム名句MAKE」については以下のとおりである。
・俳句に馴染みのない小さなお子様や、その保護者の方など、ファミリー層が多く挑戦してくれた。
・筆で字を書く体験、俳句を作る楽しさを知ってもらう第一歩になったと感じる。
・島田市博物館の一筆箋を使用することで、島田の文化に触れる体験をしてもらえたと感じる。
・子どもの参加を見込んで、くじを平仮名にする工夫を行う必要があった。
・茶飴が子どもにも人気だった。

・来てくれたお客さんがインスタ世代でない。

２　「川越人足体験」については以下のとおりである（引用：令和４年度しずおか中部連携中枢都市圏地域課題解決事業発表会資料、および、和菓子バル直後の学生の反省から）。
・当初の予定より多くの参加者が来てくれた。
・子供から大人まで幅広い層への需要あり。
・あまりにもブース感がなかった。
・川越人足の説明が不十分だった部分があった。
・蓮台を担ぐ場所（写真映りなどを気にした場に）。
・歴史に関しての説明をできるようにしたい。
・蓮台は上げることが目的になってしまっていた。歴史の説明等必要。

３　「和菓子バル」参画への感想については以下のとおりである（引用：令和４年度しずおか中部連携中枢都市圏地域課題解決事業発表会資料、および、和菓子バル直後の学生の反省から）。
・島田市博物館や、着物のレンタル施設に協力していただき、島田の文化に存分に触れることができた。
・自分たちが育ってきた静岡県にもまだまだ知らない魅力がたくさんあるということを再確認できた。
・ブースの企画運営はとても大変だったが、その分大きなやりがいを感じることが出来た。
・和菓子やお茶だけでなく、島田市の他の魅力もアピールできたイベントになったと思う。

５　地域への提言
１　「和菓子バル」では、川越人足についての説明を付した上で、希望者に連台体験をしてもらう。
２　「和菓子バル」以外にも何らかのイベントが開催できないか検討する。

６　地域からの評価
１　来場客からの川越人足の写真撮影の希望が多く、一定の人気があることがわかった。
２　「和菓子バル」開始時刻よりも相当早い時刻の来場も複数いたため、本イベントが好意的にとらえられており、地域に根付きつつあることがわかった。

７　学生による参考文献
・静岡英和学院大学ホームページ（http://www.shizuoka-eiwa.ac.jp/sp/news/kikaku094/）。
・コトバンク（https://kotobank.jp/image/dictionary/nipponica/media/81306024003289.jpg）。
・島田市公式ホームページ　川越遺跡の概要
（https://www.city.shimada.shizuoka.jp/shimahaku/kawagoshi/kawagoshi-iseki/）。
画像出典元
・島田市観光協会ホームページ　大井川川越遺跡（観光情報｜一般社団法人島田市観光協会（shimada-ta.jp）。
・島田市観光協会ホームページ　【芭蕉句碑】馬方句碑観光情報｜一般社団法人島田市観光協会（shimada-ta.jp）。
・島田市博物館。

図２　本学学生による川越人足再現

図３　「運と実力で作り出せ！ランダム名句MAKE」ブース

図４　本学参画学生・教員全体集合写真

以上

しずまえプロモーションの手法を検討・追究

静岡産業大学 経営学部 岩本武範研究室
教　　員：准教授　岩本武範
参加学生：ラマバラニアンユマナンタ、近藤奈々世、
趙悦伽、武田明莉、遠藤千尋、村瀬陸翔、村越太一、
栗田睦也

１要約

しずまえ認知度のさらなる向上を目指し、しずまえ水産物の喫食機会の向上や年代別コミュニケーションの工夫を要する点をアンケート解析から導いた。ワークショップからは、視聴維持率向上に資するSNS活用、規格外品のサブスクリプションの検討が有効であるという仮説を導出した。

２研究の目的

本研究は、しずまえの認知度を向上することに特化したものになっている。
また、令和12年度に80%の認知度（令和4年度62.2%）に向けた施策を見出すため、現状の課題や不足していると考えられる仮説を導出することを目指す。

３研究の内容

本研究では、しずまえ認知度向上に資するアンケート結果の解析と、本学と静岡市の共同ワークショップにより、上記目的を達成するための仮説を導出することを行った。アンケートは200サンプル、ワークショップは８名の学生と静岡市職員3名とがディスカッションする形式を採用した。
※ワークショップは、指導教員からの趣旨説明と静岡市からのレクを事前に行った

４研究の成果

(1) 当初の計画

当初は、地域のスーパーマーケット等のデータ（しずまえ商品の購入傾向）と照合するなど、買い物動向からのアプローチを検討したほか、飲食店からの聞き取りを想定した。

(2) 実際の内容（Ａは予定どおり、Ｂは一部修正、Ｃは中止など）とその理由

Ｂと評価している。上記の通り想定したが、本研究を進めるに値するデータが静岡市に蓄積されており、また新たにアンケート調査を行う機会にも恵まれた。さらには、本学学生を交えたワークショップの開催が有効と考え、担当課と協議のうえ費用をより実効性のある方法を選択した。

(3) 実績・成果と課題

ここでは主な実績・成果にしぼりを報告し、最後に課題を述べる。

本研究では、2022/11/26および27に行われた「産業フェアしずおか」における来場者アンケートの結果をもとに、どのような層に、どのような推しを提示するのが有効であるかについて検討した。図1はアンケート会場の様子、図2はアンケートの主項目である。

図1：アンケート会場

【目的】しずまえの認知度を測定する（各項目における浸透度）

- デモグラフィック
  →性別，年代，居住地区（静岡市３区、市外）
- 嗜好性：各食品を食する頻度
  →桜えび（由比），マグロ（清水），しらす（用宗）
- 取組みに関するアイデア

図2：主なアンケート項目

アンケートでは、200サンプルを取得したが、回答漏れなどを省き、以下のように、しずまえの認知有無を軸に各項目単位で統計的検定を行った（図3、図4）。

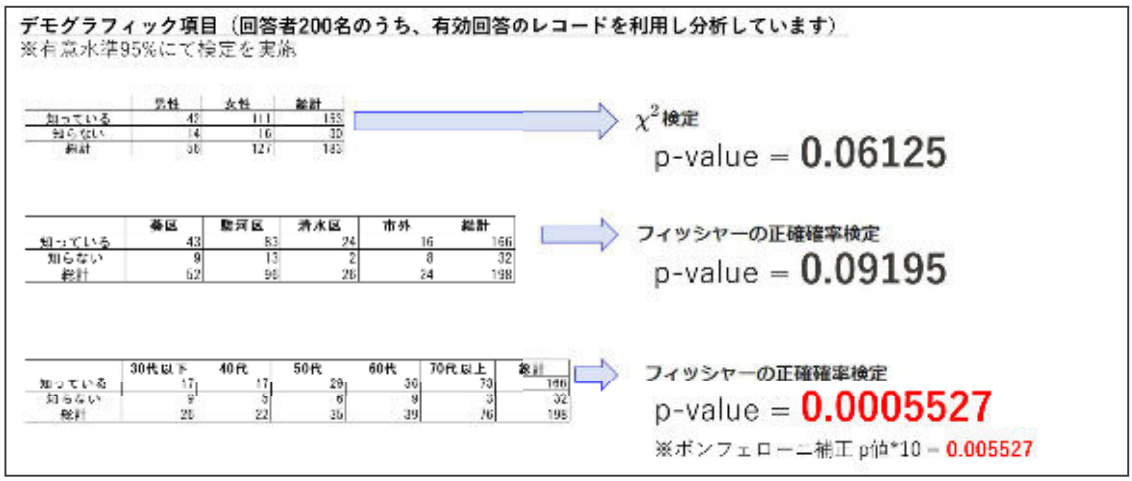


図3：デモグラフィック項目

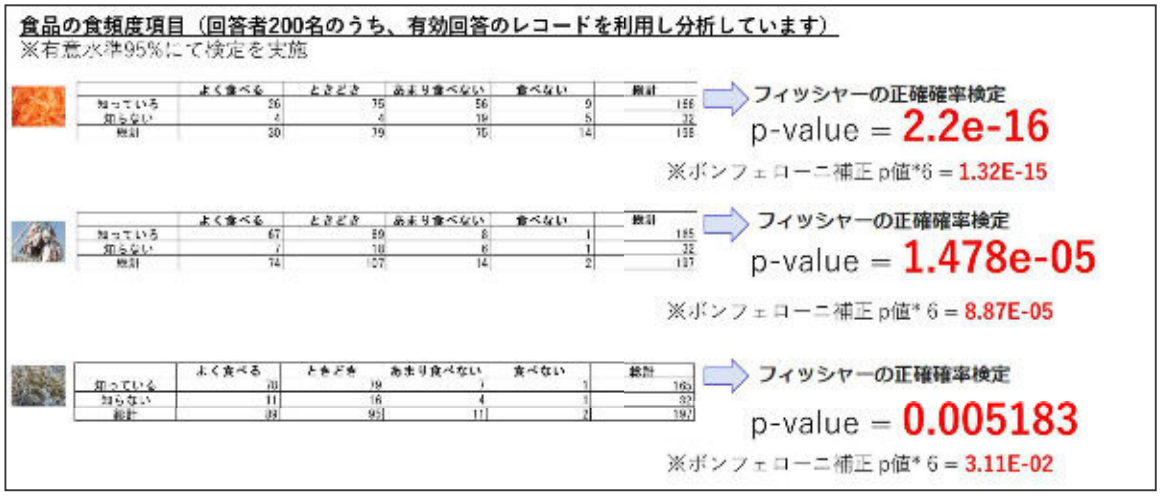


図4：食品の食頻度項目

統計的検定の結果、年代および喫食頻度（食品の食頻度）による認知の差が確認された。本研究では、性別や居住区を独立で検定した場合に差は見られなかったが、サンプルを拡大し多くの要因を組み合わせることで、より鮮明に認知度向上に向けたプロモーション施策を検討できる可能性がある。

さらに、2023/ 3/ 17に、静岡市に蓄積された各種資料や過去の取り組みなどを基にした本学学生と静岡市職員によるワークショップを開催した。

図5：ワークショップの様子

ワークショップでのアウトプットは、主に２点である。認知度向上のターゲットと考えられる若者（20歳前後）層のアイデアを収集した結果、①視聴維持率向上を企図したSNS活用、②規格外品のサブスクリプション開発などが提案された。①における視聴維持率向上は、単にSNSマーケティングを発想するものではなく、2秒フックなどのテクニカル部分も含めた工夫を包含し、②ではSDGsの文脈からも、不要を必要に変えるというコンセプトの訴求が導出された。

図6：ワークショップホワイトボード要約①

図6の左側は、視聴維持率向上のために行うウェブマーケティングのテクニカルな部分と、伝えるテーマを示している、サンバルとは、インドネシアやマレーシア料理に用いられる辛味調味料のことであり、外国人に向けたコンテンツも重要であるとした。一方、右上部は、しずまえロゴの新たな使い方を提案したものであり、示された皿のほかにも、バンズ等への焼印などへ活用する方法も提案された。右下は、カリフォルニアロールにヒントを得た、しずまえロールの検討も良いとされたものである。

図7：ワークショップホワイトボード要約①

さらに、図7においては、SDGsにも通じる議論がなされ、不要を必要に変えるコンセプトから、規格外品のサブスクリプション化を検討し、しずまえ品の喫食頻度を高める動きにつなげることが重要ではないかという提案がなされた。そのほか、丸子～三保地区までのサイクリングロードを模して、しずまえ街道を誕生させるなど、日常にとけこむための検討もなされた。

(4) 今後の改善点や対策

本研究における改善点は、アンケート調査におけるサンプル数の拡大にある。EBPMの視点から考えても、より鮮明にSROIの向上に資するボリュームで取得することが望まれる。しかしながら、コストの問題もあることから、たとえば、県下の大学生を集めたワークショップなどを開催するなど、本研究の方法を援用して取り組むことも有効であると考える。

５地域への提言

本研究の結論要約として、以下の３点を示す。

・年代、喫食率により認知度に差が確認された
　→食の体験は有効であると考えられることから、年代別で接触する
　　媒体を再整理することでより認知度は高まるものと考えられる。
・視聴維持率の向上を企図したSNSマーケティングの必要性
・規格外品のサブスク事業の検討

以上を重点的に検討いただき、実装いただければと考える。

６地域からの評価

記載なし